

偶然の賜物 「受賞顛末記」

木村 敏美

知人の息子さんが油絵画家で、十年程続けていた画材店での個展が、昨年は博多の中心地中州にあるアクロスというビルの二階での展覧会になった。

毎年観に行っていたが最終日のこの日は四時迄でぎりぎり間に合い、彼の絵は高い山の頂上を描いた絵で心に響くものがあつた。彼に絵ハガキはないかと聞くと、いつも個展をやっている画材店にはあると言う。閉店時間も迫りバスでは時間がかかる。幸い福岡市から高齢者に配布される乗り物無料券を、バス電車ではなくタクシー券にしていたので店迄飛ばした。

部屋に入ると彼はすでに到着していて、今迄の作品が飾られていた。

そこにもう一人見知らぬ男性が絵の批評をしていて部屋には三人だけだった。絵ハガキを購入し彼に、バティックの絵が表紙絵になった「悠遊」二十七号と手作りのエッセイ集「感謝^目」を手渡した。表紙絵はマレーシアで描いた蠟結染めの絵だと説明していると、男性も観たいと言われ、エッセイ集の中にも載せているバティックの絵も観て、自分はインドネシアに何度も行った事があり、同じ手法の手描きのバティックの価値は解ると言われた。そして来年の太平洋西日本展の染織の部に出す様勧められた。彼が「僕が手続きをします」と言った通りの運びとなり、令和三年六月二作のバティックの絵を染織の部に出品し「マレーシアの想い出」がカシキ美術賞、「コーヒー娘」が入選と思いがけない結果を戴いた。

この偶然の出会いがなかったら、三十年程前主人の転勤で行ったマレーシアで現地の人から学んだバティックの絵は自宅や山小屋に飾っただけで、他は物置に眠ったまま終わっただろう。

この年だけタクシー券を取得していた事、居合わせた男性がバティックに精通していた事、この年私の絵が「悠遊」の表紙絵だった事、これらの偶然が重なって、存在すら知らなかった太平洋展の世界に導かれる事になった。

三つの偶然の賜物に感謝したい。